短信
菊地真/アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 14(2022)52-55

古典は日本語作文教材に有効か
―海外で「多読」を促す―

菊地真

要旨
近年、日本語教育に日本古典を教材とし、従来にない工夫により、学習者の日本語能力の向上に資することの議論がされ始めた。稿者は 2021 年度前期、中東の国立大学高学年を対象に日本古典を作文能力増進のために用いた授業を実践した。教材に拙著『日本語学習者のための日本古典入門』を用いた。その際、この第一部にある課題文の訓詁学的解説はせず、課題文講読に先立って、作文課題の説明をした。その結果、提出された作文は、学習者独自の論点・視点を述べる箇所の作文全体に占める比率が高まった。

キーワード
日本語作文、日本古典、多読、リベラルアーツ、エジプト

1. はじめに
1.1 今回の論点
日本語教育における多読の重要性は多くの論者により指摘され、近年もすぐれた論考が提唱され続けている(1)。稿者はエジプトの国立大学大学院・学部高学年の論文指導を担当する立場から、多読が日本語学習者の作文能力を向上させる点に関心がある。これまで指摘されてきたように、多読は日本語教育において有効である。それは海外における日本語教育現場においても同様である。しかし海外の学習者は日本国内の留学生に比べ、閲覧可能な日本書籍が少ない。彼らには、国内の留学生のように、自主的に多量の本を読ませる中で、一定の問題意識形成を促す方法は採れない。ゆえに海外の教育現場において「多読」の方法を取り入れるには、国内の現場では必要ない工夫も考えなければならない。彼らは国内の学習者同様に多量の書籍を博捜し得る環境にないのだから、読むべき書の「質」を高めるべきだ。そこで学習者に、方向性なく乱読するのではなく、グレイトブック＝古典を読むことをすすめ、そこから読みとれる課題に関連する文献・無文字情報を系統立てて「多読」することを促すことを提唱する。

1.2 これまでの経緯
古典を多読のトリガーとするとは、古典は精読するものと決めつけてきた従来の考え方からは生じようのない発想であろう。しかし「多読」の手段として古典を用い、学習者の日本語創作能力を向上させることは可能である。菊地（2021a）で指摘したように、元来、古典を文章創作の為の教材に用いるのは日本の伝統である。従来、古典教育といえば古典文法習得を主とする傾向があった。稿者は菊地（2019）でこれを批判し、文法教育は学習者に必要な最低限にとどめつつ、最大限に効率的に習得できる工夫を提唱した。また菊地（2020a）で、学習者が文法の習得に要する労力・時間を短縮することで、古典を作

文教材として有効に用いることを論じた。それまでに用いた教材を整理し直し、刊行したのが菊地（2020b）である。菊地（2021b）で、その教材が漢字文化圏のみならず非漢字文化圏の中東でも有効に用いられたことを報告した。今回は菊地（2020b）を用いつつ、それに工夫を加えた授業について、授業で提出された学生の作文を紹介しつつ報告する[(2)]。

2.　2021 年度の実践例

2.1　エジプトの国立大学における 2021 年度前期日本語教育での工夫

2021 年前期（9-12 月）、エジプトの言語学研究・教育の最高峰と評されているアインシャムス大学言語学部日本語学科において、菊地（2020b）を用いた授業を実施した。対象は学部 4 年生 19 人で、毎週木曜日 11 時から 13 時まで、10 月 14 日から 12 月 23 日まで実施した。菊地（2020b）は三部から成る。第一部は古典読解篇で、第二部は文法・語彙篇、第三部は古典知識篇である[(3)]。授業 2 時間の前半 1 時間で第一部を、後半 1 時間で第二部を講義した。第一部の授業では、最初に課題文の作者や成立時代さらに概要を説明した後、課題文講読・解説を省き、いきなり作文課題を説明し、課題文は＜ヒント＞であげられている文と同等に作文のための資料として読ませた。授業目的が訓詁学的専門家養成ではなく、日本語創作能力の強化であるというメッセージを鮮明にするためである。

この結果、学習者に課題文・ヒントの文を読みこなし、進んで課題に沿った数点の文献も自主的に読むことを促し、彼らが独創的な作文を書けるようになることにつながった。

2.2　アインシャムス大学言語学部日本語学科 4 年生の作文紹介

資料 1　学生の作文 1『たけくらべ』

愛は差別を知らないが、社会はこんなことを認めない。ある愛情物語は社会に勝つ。しかし、他はできない。

日本のたけくらべでは遊郭地吉原周辺で育てられた美登利がいた。彼女の姉が遊女であり、彼女も姉と同じく遊女になる未来は待っている。彼女の通う学校で信如という男の子がいた。彼の父親は龍華寺で和尚をしており、彼も父親と同じく僧侶になることを確定していた。美登利と信如はお互いに想いを寄せていたが、彼は友達に冷やかされるのを嫌がって彼女を避けた。彼女は、信如が自分にばかり冷たくすると思ったので、二人の間には溝ができた。

最後には、美登利は遊女になり、信如は僧侶になった。この愛情物語は破たんした。

エジプトの「サウェレット･エル･ マディーナ」という映画では「ファトマ」という女の子がいた。ファトマが父親のサーレムと旅行へ行って、帰ると、家と工場が火事だった。彼女の家族は貧乏になり、父親が「サーベル」という有力な実業家の工場で働いた。ここでファトマはサーベルの息子と会った。彼は「アフマド」といい、彼女が好きになった。サーレムが死んだあと、アフマドがファトマと結婚したかったがサーベルが反対した。しかし、アフマドは恋に執着し、結局結婚ができた。

アフマドは恋人のために戦った。しかし、信如はそうしなかったので彼女を失った。

菊地（2020b）第一部『たけくらべ』の章では、魯迅『故郷』･『ロッダ・カルビ』･『伊勢物語』･島崎藤村『初恋』をヒントにあげている。『ロッダ・カルビ』は中東の恋愛物語

であるが、この学生はそれに飽き足らず、「サウェレット・エル・マディーナ」という映画作品の方がより『たけくらべ』と比較する意味があると考えた。この作文は、［恋愛対社会］という論点を見つけ出し、自主的に関連作品を探し出してきた姿勢を評価できる。

資料 2　学生の作文 2『東海道中膝栗毛』

『東海道中膝栗毛』は「十返舎一九」によって書かれた本だ。その本はユーモアをテーマとしつつ、江戸後期の東海道を旅行する人にとっての観光案内書でもあった。主人公は「弥次郎兵衛」と「喜多八」という江戸に住んでいた人だ。二人は京都へ旅行する途中、様々なこっけいな場面が出る。さらに、二人にとって東海通の郊外に住んでいる人は教養があまりないということである。それで、二人は東海通の郊外の人に多くのいたずらをする。その作品は非常におもしろい。

『我々のきれいな国』はエジプトの観光案内書の中でも有名な本だ。その本は「ターレク．アブドアルアジーズ」によって書かれた。

エジプトの一番有名な観光地もその本の中で観光客のために紹介された。また、エジプトにある歴史的なモスクや教会の写真も本に載せられている。その本はエジプトの観光を支えるのに大きな貢献をした。

『東海道中膝栗毛』では「時蕎麦」（古典落語）・『更級日記』をヒントにあげている。この学生はそれらも読んだ上で、『東海道中膝栗毛』の観光ガイドブックとしての性格に着目し、エジプトの観光案内書である『我々のきれいな国』を探し出し、紹介している。

資料 3　学生の作文 3『雨月物語』

「菊花の約」は江戸時代後期に、上田秋成(1734～1809)が著した『雨月物語』のうちの一編である。

播磨国・加古川に母親とともに暮らす丈部左門は若い学者がいた。ある日知人の家を訪ねると、隣部屋には高熱にうなされ寝たきりの旅人がいる。左門は薬やお粥を与え看病すると徐々に回復する。旅人は出雲国富田の城主・塩冶掃部介に仕える赤穴宗右衛門という侍であった。左門と宗右衛門は義兄弟の契りを結ぶ。

『アルボスタギー』という小説はエジプトのヤヒヤ・カッキーが書いたものだ。この小説では「アッバース」という郵便屋はカイロからアスユート県のコム・アル・ナヒル村で働くために移り、村の郵便局を担当し、最初はそこでの生活に適応しようとしたが、彼は手紙の内容を覗いたから、多くの問題を起こす。

二つの小説では主人公は困っている人を助けるつもりで他人の事に干渉してしまう。『雨月物語』では左門が病気の宗右衛門を助け、薬を与えた。『アルボスタギー』ではアッバースが手紙で女の人が恋人に妊娠していること告げている内容を読んだから、それらを組み合わせたいと思い、相手の男に妊娠のニュースを伝えようとした。『雨月物語』の結末は宗右衛門が徐々に回復し、彼と左門は義兄弟になった。しかし、『アルボスタギー』の結末はアッバースのせいで妊娠中の女子が父親によって殺された。

『雨月物語』では『古今小説』（中国古典）と小泉八雲『怪談』とヤヒヤ・ハエイ『飛

脚』をヒントにあげている。『飛脚』は中東の義侠心ある人の物語であるが、この学生はそれに満足せず、ヤヒヤ・カッキーの『アルボスタギー』を自発的に調べ、紹介している。それは『雨月物語』の中に「主人公は困っている人を助けるつもりで他人の事に干渉してしまう」という要素を見出し、そこを論点としようとしたからである。

2.3　成果確認

今回、提出された作文を見ると、自分で発見した論点とか独自の視点とかを端的に述べていることが見て取れる。稿者は菊地（2020a）で、これと似たようなことを 2016-2019 年度の中国・北京理工大学外国語学部生の作文にも見られることを報告している。今回の作文は北京のそれらに比べ、分量が短い。その中で独創的な論点とか視点を述べているのが特徴である。これは「借り物でない自分の考えを、自分の言葉で述べる」という上級作文の目的に照らし、好ましい傾向と言える。

3.　むすび

今回、古典を教材に用いることで多読を促し、作文能力の向上につなげるために、授業で作文課題の説明を優先し、課題文の訓詁学的解説を避け、課題文もそれに関連する＜ヒント＞の文も等しく扱うという工夫をした。これにより、学習者の独自の論点・視点を述べる箇所の作文全体に占める比率を高めることができた。

（菊地真きくちまこと・エジプト国立バンハー大学／アインシャムス大学・
vakeneco28@gmail.com）

注

1. 高橋（2016）、門倉（2018）など
2. 学生の作文を本誌に掲載することは本人の了承を得ている。
3. 本書の詳細は菊地（2020b）を、概要は菊地（2021b）を参照のこと。

参考文献

門倉正美（2018）「リーディング・ワークショップで多読する―アカデミック・ジャパニーズにおける多読のすすめ―」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10，1-17.

菊地真（2019）「中国の大学における日本古典教育―大学専攻日本語 8 級試験受験者のニーズに応えた教材開発―」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』11，73-80.

菊地真（2020a）「古典教育と作文能力―中国学生の日本古典を題材とした作文分析を通じて―」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』12，45-53.

菊地真（2020b）『日本語学習者のための日本古典入門』学術研究出版

菊地真（2021a）「古典教育の現代的意義―不易流行―」『AJALT』44，26-29.

菊地真（2021b）「中東の大学におけるリベラルアーツとしての古典教材を用いた教育実践」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』13，10-18.

高橋亘（2016）「日本語多読研究に向けた基礎研究―多読活動の類型化の試み―」『言語・地域文化研究（Language，area and culture studies）』22，369-386.